

# 意見文課題に基づく文章表現スタイルの日西対照研究

## —日本の学生とスペインの学生の作文比較—

専攻 教科・領域教育専攻  
コース 言語系コース（国語）  
氏名 西條 結人

指導教員 小野 由美子

### 1. 研究の目的・背景

本研究の目的は、意見文課題における日本語母語話者とスペイン語母語話者の文章表現スタイルを比較することにより、日本語とスペイン語の文章表現スタイルの特徴を明らかにすることにある。

近年の国際社会においては、グローバル化が進行し、多文化共生社会になりつつある。その社会構造の変化の中で、異なる言語文化的背景を持つ人々による言語行動が要因となり、異文化間摩擦、異文化間ミスコミュニケーションの問題が生じることが予想される。社会を構成するひとりひとりが言語文化的な多様性を受け入れるための理解と、互いを尊重する姿勢が不可欠である。これは話しことばによる円滑なコミュニケーションの場合はもちろんのこと、文章による意思伝達においても同様であり、相手がいかなるスタイルを用いるのかを互いに理解することは重要である。本研究は、日本語とスペイン語の論理構造を明らかにすることにつながり、スペイン語を母語とする日本語学習者のための日本語教育にも貢献しうると考えられる。

本研究における「文章表現スタイル」とは、「内面にある思考や感情が知覚で受け取れるように文章として外に現れたもの」と定義した。分析の観点として、「課題に対する書き手の意見」と文章表現スタイルの形式的特徴である「文章構造」、内容的特徴である「説得のアピール」を

設定した。

本研究では、上述の3つの観点から、日本語母語話者とスペイン語母語話者がそれぞれ母語で書いた意見文の特徴を究明した。

### 2. 論文の構成

第1章 研究の目的と方法

第2章 先行研究の分析

第3章 作文調査の概要：データ収集と分析の  
枠組み

第4章 作文調査の結果

第5章 本研究のまとめと今後の課題

### 3. 論文の概要

第1章では、研究の目的と方法を述べ、文章表現スタイルの日西対照研究にどのような可能性があるかを検討し、本研究の位置づけを行った。

第2章では、文章表現スタイルに関する研究についてまとめ、本研究における課題を明らかにした。

第3章では、データ収集とデータ分析の枠組みについて詳述した。作文調査は、インターネット上のアンケートサイト SurveyMonkey (<https://jp.surveymonkey.com/>) を用い、意見文課題と回答者の性質などの項目から成る作文調査用紙を作成し、回答者のメールアドレス宛てに送付した URL からアクセスしてもらうという

方法を用いた。日西両言語の母語話者から、日本語意見文 30 編、スペイン語意見文 25 編のデータを得た。

得られたデータは、それぞれの母語話者がどのような立場で論を展開しているかという「課題に対する書き手の意見」の観点から分析した後、主張の出現位置からみた文章構造類型（木戸, 1992）を用いて、①頭括型、②中括型、③尾括型、④双括型、⑤散括型、⑥無括型に分類した。さらに、両母語話者間で最も用いられていた「双括型」を、主張の種類と組み合わせによって3つの型に分類し、分析を行った。

「説得のアピール」は、Connor and Lauer (1985)、Kamimura, T. and Oi, K. (1998)、近藤 (2013) を参考に、「言論のアピール」、「情動のアピール」、「習慣のアピール」の3つの下位分類を設定し、グラウンディッド・セオリー・アプローチに基づいて分析した。

第4章では、「課題に対する書き手の意見」、「主張の出現位置からみた文章構造」、「説得のアピール」の3つの観点からデータ分析した結果を提示し、考察を行った。

その結果、日本語母語話者の意見文の文章表現スタイルは、「双括型」を用い、「言論のアピール」と「情動のアピール」を組み合わせることで、読み手を説得するスタイルであった。

一方、スペイン語母語話者の意見文の文章表現スタイルは、日本語母語話者と同様に「双括型」を用いてはいるものの、「言論のアピール」と「習慣のアピール」を組み合わせるというスタイルであった。

また、「説得のアピール」の下位カテゴリーにおいて、日本語母語話者とスペイン語母語話者間で違いが見られた。例えば、文章中で環境問題を書き手自身の意見の根拠に挙げている日本

語母語話者は非常に少ないが、スペイン語母語話者は多く見受けられたことが挙げられる。

第5章では、本研究のまとめを行い、日本語教育への示唆と今後の課題について次のように総括した。

教師が文章表現スタイルを教えるときには、文章構造だけでなく、「説得のアピール」にも注意を払い、母語話者がどのような「説得のアピール」を用いて意見文を書いているかを説明することが重要である。文章構造と「説得のアピール」の両側面からアプローチを試みることで、学習者の作文能力の向上が期待できると考えられる。さらに、互いがどのようなスタイルを用いて文章を書くのかを理解することは、異文化間コミュニケーションにおける相互理解に貢献しうる要素であると考えられる。

#### 4. 今後の課題

本研究の今後の課題は次の3点である。

第一としては、作文課題の読み手を統制し、今回の作文調査結果と変化が見られるかどうかを検証することである。

第二は、日本とスペインの作文教育と文章表現スタイルの関わりを調査することである。

第三としては、同じスペイン語母語話者の中でも、ラテンアメリカのスペイン語母語話者が書いた意見文において、今回の作文調査と同様の結果が出現するのかどうかを明らかにし、同じスペイン語母語話者間で最も一般的な文章構造と「説得のアピール」を持つ意見文に対して、それぞれの母語話者が論理的であると判断するのかを検証することである。

以上の点を踏まえ、本研究で得られた結論がどこまで一般化できるかについて、更なる調査研究が必要である。